

英語の授業のなかで文化的内容をいかに活用してゆくか

—近年の研究と今後の課題—

広島大学大学院 伊藤 隆

1. はじめに

新学習指導要領の目標からもわかるように、英語科のなかでも、国際理解を深めるために、言語についてのみならず文化についての教授が必要である。しかし、授業のなかで具体的にどのような文化教授を行うべきか、あるいは行うことが可能なのかについては、必ずしも明らかではない。本小論では、文化的な知識が学習者の読解に及ぼす影響について、実証的に調査している先行研究をまず概観する。そして、文化教授にともなういくつかの制約や問題点を検討し、文化的内容を我が国の中学校や高等学校の英語の授業のなかで活用するには、どのような手法が可能であるのか、考察を加えてみたい。

なお、本小論においては、Adaskou et al. (1990) の「文化」の定義を踏襲する。彼らは、「文化」を 1) aesthetic sense 2) sociological sense 3) semantic sense 4) pragmatic (or sociolinguistic) sense の4つの領域に分類している。1)は Chastain (1976) らによって、large C Culture と呼ばれていたもので、文学や哲学など人文科学的な側面を指す。2)は small c culture とされていたもので、生活様式や対人関係など文化人類学的側面を指す。3)は言語上にあらわされている概念体系の領域である。それらの概念は、生活様式に密着しているため、それぞれの文化に固有のものとしてされている。4)は、相互の意思疎通を可能にする、背景知識・社交技術・擬似言語学的技術などである。かつては、1)と2)の二分法で「文化」を分類することが多かったが、近年では2)が細分化され、3)や4)などが派生している。本小論における「文化」あるいは「文化的内容」は、上記の4領域を指すこととする。

2. 文化教授と学習者の読解力との関係

文化的な知識が学習者の読解力に及ぼす影響についての実証的な研究として、Johnson (1981, 1982)、津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ (1992) がある。

Johnson (1981) は、英文の複雑さと文化的背景が、EFL 学習者の読解に与える影響を調査した。そして、EFL 学習者にとって、英文が構文的に簡単ならば、たとえ文化的知識がなくても読解できるが、より難解な文章になると、文化的知識があるのとないのとでは、その読解に差が生じるとした。

Johnson (1982) は、文化的な経験が、EFL 学習者の読解に与える影響を調査した。その結果、実際の経験によって獲得された文化的知識は、EFL 学習者の読解力に正の影響を与える、と結論づけている。

また、津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ (1992) は、EFL 学習者の読解過程におい

て、文化的スキーマが果たす役割を測定しようとした。そして、EFL の中級レベルの学習者についても、上級レベルの学習者についても、テキストを読む前に、読解に必要な文化的ヒントを与えると、より良く理解できるようになる、としている。

以上3件の先行研究より、英文の背景にある文化的内容になじみがなければ、たとえ文法や語彙の面ではある程度の知識があっても、読解に支障をきたすことがある、ということがいえるであろう。また、テキストの題材として文化的な内容が扱われていて、その読解に必要な文化的知識が学習者に十分ない場合、それを補ってやり、学習者の内容スキーマ (content schema) を活性化、再構成してやったり、新たに創造してやることにより、読解力が向上することがある、ということもいえるであろう。それでは、学習者の文化的な内容スキーマの活性化・再構成・創造のためには、どのような文化教授をすべきであろうか。しかし、具体的な手法について言及する前に、我が国の中高生対象の文化教授実施にともなう、いくつかの問題や制約について、先行研究をもとに考察してみたい。

3. 文化教授にともなう問題点

文化教授にともなう問題点として、①文化的内容の指導方法が定まっていない、②外国語教育において利用可能な文化の記述が少ない、③時間的な余裕がない、④教師の負担が大きくなる、⑤教材の文化的内容が、文法事項などほかの項目の学習の障害となることがある、の5点を挙げる。

①文化的内容の指導方法が定まっていない。

Byram (1986) は、文化的内容の指導方法が十分に組織化、体系化されていないことを指摘している。一口に文化教授といっても、テキストを学習者に読ませる際に、教師が口頭で情報を伝達すればよいのか、情報を短い文章にして読ませればよいのか、多肢選択の設問に解答させることなどを通して情報を与えればよいのか、また、文献を調べさせるなどの作業をさせればよいのか、といったように、どのように指導すべきなのかが必ずしも明確ではない。

②外国語教育において利用可能な文化の記述が少ない。

深沢他 (1992) は、言語構造の記述に比べて文化の記述はるかに困難である点を指摘し、コミュニケーションを成立させる要素のうち、文法能力以外のものをすべて文化という範疇に抽象化し、それを記述し、ルール化する研究が未発達であった、と述べている。その結果として、学習者にどのような文化的内容を提示すべきなのか、不明確になる場合も予想される。

③時間的な余裕がない。

Henderson (1980), Halverson (1985), Heusinkveld (1985) は、限られた授業時間のなかでは、基本的な文法事項を教えるのに精一杯で、文化教授に割ける時間的な余裕が十分にはない、と述べている。これは我が国の状況にも通じることで、文化教授にあまりに多くの時間がとられると、文法事項や4技能の教授や指導に敵寄せがいく恐れがある。

④教師の負担が大きくなる。

Henderson (1980) は、教師が十分な文化的知識をもっていないと述べているが、冒頭で触れた Adaskou et al. (1990) の定義からもわかるように、「文化」という概念が包含する領域は余りに広く、それらを教師が網羅して学習者に教授するには、多大な労力を必要とする。

⑤教材の文化的内容が、文法事項などほかの事項の学習の障害となることがある。

Winfield & Barnes-Felfeli (1982) は EFL 学習者の英作文において、なじみのある題材について書くときと、なじみのない題材について書くときとは、その量・文法的正確さ・構文の複

雑さについて、どのような違いが生じるか実験を試みた。その結果、なじみのある題材についての作文は、上記3点について、いずれもなじみのない題材についての作文よりも優れていた。この点をふまえて、英作文をさせる目的が、新たに学習した文法事項の定着であるならば、その作文はよく知られた既知の事柄についてのものであるべきである、という示唆を導きだしている。この論は、文法事項の定着などが目的であるならば、文化教授を行わなければ学習者が理解に困難をきたすような教材を使用するのは適切ではない、という見方につながってゆくと考えられる。

以上のような問題点を抱えた上で、我が国の中学生や高校生にどのような文化教授が可能であるか。単語の文化的背景を教える、というのが1つの効果的な方法である。

4. 単語の文化的背景の教授

前節で概観した、いくつかの問題点や制約を鑑みたときに、実施が比較的容易な文化教授の手法の1つとして、単語の文化的背景の教授が考えられる。これは、冒頭で紹介した Adaskou et al. (1990) による文化の定義の3番目の領域、つまり、*semantic sense* に力点をおいたものである。

より具体的な例としては、例えば、松畑 (1989) がある。ここでは、日本語の朝、昼、夕方、晩と、英語の *morning*, *afternoon*, *evening*, *night* はそれぞれ対応するものではない、ということが指摘されている。つまり、日本語の「朝」は「夜が明けてからしばらくの間」を通常意味するのに対して、英語の *morning* は日の出から昼食までの間を一般的に指し、このずれが挨拶の「おはよう。」と *Good morning*. の使用時間のずれとなってあらわれる、というようなことである。このような、語の文化的背景の差異を誤解していると、外国語を適切に認知、発表する妨げになる。ゆえに、学習者にこの差異を認識させるのは、文化教授のみならず、言語教授の観点からも重要なことである。

Bensoussan (1986) は、より高度な読解のためには、基本的な語彙の意味を知っている以上に、語の機能を知らなければならない、と述べている。また、Halverson (1985) も、文化教授と語彙教授の統合を支持しているが、その利点として、1) 語についてより正確なイメージを習得できる、2) 語をより効率よく学習でき、それらの語を実際に使用するのもより容易になる、3) 退屈になりがちな語彙学習に動機づけをする、の3点を挙げている。この手法を、前節で挙げた問題や制約と照らしあわせてみると、具体的にどの語のどのような文化的背景を教授すべきかがまだ体系化されていないという理由で、②については解決されたとは言いがたい。しかし、①の方法論の点については、ほかの文化教授の手法に比べれば比較的明確であるし、③の時間的制約についても、語彙教授との統合により、文化教授をほかの方法で単独に行うよりは、はるかに少ない時間で大きな効果が期待できる。また、④についても同様に、ほかの文化教授の手法を用いる場合よりも、教師の負担は少なくすむと予想される。さらに、⑤を前提とすると、習得すべき文法事項の多い中学生のリーディング教材やライティングの課題には、文化的に中立的なものを使ったほうが良いということになり、教材のなかの文化的内容が量的に少なくなってしまうと考えられる。それを、語の文化的背景の教授により補うことができ、従来文化教授が難しいとされてきた英語学習の初期段階においても、初歩的な文化教授を可能にする。

5. おわりに

以上、日本人教師が英語の授業のなかで、文化的内容を活用する1つの実施可能な方法として、「語の文化的背景の教授」を提示してみた。この手法は、語彙教授との統合により、文化教授を

単独で行うほどは多くの時間がかからないこと、英語学習の初期の段階からも開始することができること、学習者に英語学習、特に語彙学習への動機づけを与えられること、教師にとっても着手しやすいこと、などの利点をもっている。また、この手法は、テキスト読解のための語彙指導として実施すれば、第2節で提起した、学習者の文化的な内容スキーマの活性化・再構成・創造の一助としても位置づけられるであろう。本発表では、AET の役割については考察しなかったが、AET の協力があれば、語の文化的背景をより充実したかたちで教授することができるであろう。今後は、英語教育の枠組のなかでの文化的内容を、いかに体系化してゆくかという点で、より一層の研究が必要とされる。そして、それらの文化的内容の指導方法の確立が、急務とされるであろう。

参考文献

- Adaskou, K., D. Britten & B. Fahsi. 1990. Design decisions on the cultural content of a secondary English course for Morocco. English Language Teaching Journal. 44/1. 3-10.
- Bensoussan, M. 1986. Beyond vocabulary: Pragmatic factors in reading comprehension - Culture, convention, coherence and cohesion. Foreign Language Annals. 19/5. 399-407.
- Byram, M. 1985. Cultural studies in foreign language teaching. Language Teaching. 15/4. 322-336.
- Chastain, K. 1976. Developing Second-Language Skills: Theory and Practice. 2nd ed. Houghton Mifflin Company.
- Halverson, R.J. 1985. Culture and vocabulary acquisition: A proposal. Foreign Language Annals. 18/4. 327-332.
- Henderson, I. 1980. Cultural strategies in elementary college language courses. Modern Language Journal. 64/2. 190-196.
- Heusinkveld, P.R. 1985. The foreign language classroom: A forum for understanding cultural stereotypes. Foreign Language Annals. 18/4. 321-325.
- Johnson, P. 1981. Effects on reading comprehension of language complexity and cultural background of a text. TESOL Quarterly. 15/2. 169-181.
- Johnson, P. 1982. Effects on reading comprehension of building background knowledge. TESOL Quarterly. 16/4. 503-516.
- Winfield, F.E. & Barns-Felferi, P. 1982. The effects of familiar and unfamiliar cultural content on foreign language composition. Modern Language Journal. 66/4. 373-378.
- 深沢清治、高塚成信、川尻武信、杉野直樹、川島浩勝. 1992. 「異文化理解・異文化コミュニケーションを目指した英語教育」 『英語教育』 41/7/9月増刊号. 63-83.
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編). 1992. 『学習者中心の英語読解指導』大修館書店.
- 松畑熙一. 1989. 「異文化理解をめざした教材研究」 『英語教育』 38/6/9月号. 28-31.